様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 １５ 日現在

機関番号：１３７０１
研究種目：基盤研究(B)（海外学術調査）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３０１０４２

研究課題名（和文）障がい者就労に備えた産業教育のためのヨーロッパ型福祉農場の分析

研究課題名（英文）Research of Social Farm in Europe for Industrial Education based on Employment of Disable Persons

研究代表者
大場　伸也（Oba, Shinya）

岐阜大学・応用生物科学部・教授

研究者番号：８０２２１８３６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　8,400,000円

研究成果の概要（和文）：非都市部等での障がい者には、農業と福祉の連携は、雇用やリハビリテーション等の場として重要である。そこで海外事例を調査し農福連携の可能性を検討した。フランスやドイツでは、社会福祉法人が数十haの農場を有し、様々な農作業を作出することで障がい者に仕事を提供していた。オランダでは、障がい者や高齢者に余暇やリハビリの場を提供するCare Farmが展開され、多くの農場が取り組んでいた。イタリアでは、有機農業に障がい者雇用を組み合わせることで、積極的な市民参加型の農業を展開していた。またタイでは、福祉政策が途上にある中で障がい者が農業に積極的に取り組むことによって自立を目指す姿があった。

研究成果の概要（英文）：Linkages between agriculture and human welfare have important roles in rural area, for disable peoples such as employment, rehabilitation, etc. This investigation focused on social farms in abroad, especially in Europe, to clear the possibility of the linkage between agriculture and human welfare. In French and German, social welfare corporations hold more than dozens hectare of farm land, and this size of farm provide many types of work for disable peoples through a whole year. Care farms of Netherland are managed by many family farmers, and they provide recreation and job training for them. Italian social farms are also managed by family farmers etc., but they are standing by own agricultural business, and their concept are based on Bio agriculture. In Thailand where the main industry is agriculture while human welfare is under developing, disable peoples are challenging self-reliance by the agriculture.

研究分野：社会福祉学

キーワード：農業　福祉　海外調査　ヨーロッパ　障がい者雇用　農場

１．研究開始当初の背景

岐阜大学応用生物科学部附属岐阜フィールド科学教育研究センターでは、平成 20 年 7 月から障がい者雇用に取り組んでおり、その過程で障がい者が農業分野で活躍し得る人材であることに気が付いた（図 1）。

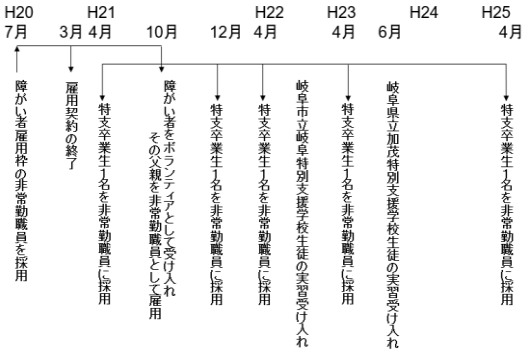

図１　岐阜大学農場における障がい者雇用の取り組み

一方、障がい者の農業分野における活躍は、農業が盛んな非都市部で注目されるようになり、障がい者が従来のセラピー的な取り組みだけでなく、働く場としての役割も期待されていることが明らかになってきた。

このように障がい者が農業の場で働くことを考えるうえで、障がい者が農業で得られる癒し効果（園芸セラピー的要素）に加え、職業訓練としての場や賃金を得て社会参加するための場としても可能性があることがクローズアップされてきた。しかし、障がい者が農業現場で働くためには、障がい者が抱える問題や農業サイドでの課題が多く、容易に解決できるものではないため、先進事例を参考とするなどの調査研究が必要である。

２．研究の目的

そこで本研究では、福祉に関して先進事例が多く、また農業も盛んなヨーロッパ諸国を参考として、日本における農業と福祉の連携の発展に参考となる知見を得ることを目的として、研究を行った。

また、農業における障がい者の活躍は日本やヨーロッパなどの先進国だけの課題ではなく、むしろ農業が盛んである東南アジアの国々においても大きな可能性を含んでいる。

そこで、タイ国を参考に、農業国での障がい者の社会参加のツールとしての農業の役割について調査研究を行った。

また岐阜大学における障がい者雇用をモデルとしながら、大学生の意識に対する影響と農業分野における障がい者の参加を指導するうえでの課題を検討した。

これらの調査研究によって、

(1)　先進国農業における障がい者の参加のあり方と、これによって得られる社会的メリットや課題を明らかにした。

(2)　タイ国の特別支援教育における農業や他の就労訓練の現状と可能性を明らかにした。

(3)　岐阜大学農場での実習教育において農学系の学生に対する障がい者理解と農業と福祉の連携の意義を教育した。

３．研究の方法

ヨーロッパの調査では、平成 25 年と平成 27 年にイタリアのピサ大学を訪問し、F. Di Iacovo 教授と欧米における農業と福祉の連携に関する研究成果について情報交換した。またイタリアにおける Social Farm（福祉農場）について、調査を行った。

また平成 25 年から 27 年に、フランスにおける 7 か所の社会福祉法人などでの特に農業に関する取り組みについて、施設見学するとともに、聞き取り調査を行った。

平成 26 年と平成 27 年には、ドイツとベルギー、ルクセンブルグ、オランダにおいても、社会福祉法人や Care Farm（支援農場）において、施設見学と聞き取り調査を行った。

一方、平成 25 年から平成 27 年にかけて、タイ国の特別支援学校５校を中心として、施設見学と情報交換を行った。また特に教育省基礎教育委員会事務局(Office of Basic Education Committee, Ministry of Education）特別支援教育課による支援によって、平成 27 年 9 月にこれまでの研究成果についてタイ国において報告会を開催した。

４．研究成果

ドイツ

ドイツの社会福祉法人の障がい者の就労に関する取り組みは以下のとおりである。

施設名 Lebenshilfe Bad Dürkheim e.V.
住所　Sägmühle 13
　　67098 Bad Dürkheim

この施設は、工場、住居、幼稚園、施設、学校、農場、ブドウ園などを運営している。また、施設の利用者数は、全体で 660 人いる。

利用者の特徴：主に知的障がい者であり、子供から老人までが施設を利用している。

具体的な経済活動：　金属工場、木工、食堂、教育、社会サービス、スーパーマーケット、園芸、農場、ブドウ園、ワイン醸造などの多岐にわたる様々な活動メニューがあり、207 人の障がい者が働いていた。

金属工場：　金属部品の加工や組み立て作業など従事していた。

金属加工の部署では、ボール盤や旋盤などの工作機械を使った金属加工を行っている(図 2)。事故については、重大な事故は起きていないが、起きないよう注意していた。事故については、健常者であろうとも、いつでもどこでも起きるので、障がい者だからと言って携わらせない、ということは考えられない、とのことであった。また、機械操作の危険な部分やリスクを徹底的に教育することで積極的に従事させていた。

木工作業所：　この部署では、ワイン用の木箱や、木製パレットを製造していた。また、この部署の障がい者らは木材の特性を熟知

しており、必要に応じて家具の製造や施設内のフェンスやドアの修理といった大工仕事もやっている。

図２　障がい者が働く金属工場内の様子

この部署でも、木材の切断のために丸のこ盤や自動くぎ打ち機といった危険な工具を使用していた。また印象的だったのは、製造した製品を倉庫にフォークリフトを使って積み上げ作業を行っていたのは、車椅子に乗った障がい者であった(図 3)。施設では、彼が車椅子に乗ったままフォークリフトを操作できるよう、フォークリフトを改造していた。彼は、軽度の知的障がいもあるが、フォークリフトの操作に関しては誇りをもって従事しているとのことであった。

図３　障がい者が操作するフォークリフトでの積み荷作業の様子

園芸：　花苗の生産などを中心に、800 ㎡のハウス施設を使用して園芸生産を行っている。障がい者は約 40 人働いており、支援員として 6 人のスタッフもいる。

主に夏場の仕事として、1 月から 6 月の間に、主に夏向けの花苗など約 25000 鉢を生産している。また花苗生産が終わると、町の公園や個人や会社の庭園の整備を請け負い、生垣整備や花苗や花木の植栽、除草作業や清掃などを行っている(図 4)。

ブドウ栽培とワイン醸造：　近年、障がい者の人たちが高齢化し、またその親たちも高齢化してきたため、従来自宅にいた障がい者の人たちを施設が受け入れなければならなくなってきている。その中で、高齢化した障がい者の人にも仕事に参加でき、健康にもよい農作業としてブドウ-ワイン生産に取り組み始めた。

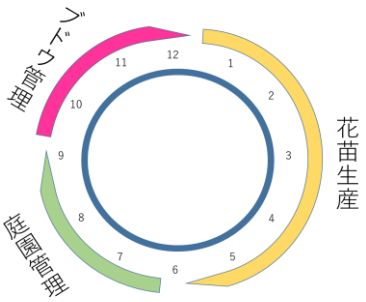

図４　１年間の施設での農業関係の作業ローテーション

栽培するワイン畑は 18ha ある。傾斜地のため機械化が遅れており、機械化できているのは 70%（15ha）程度、残りの圃場は手作業で管理しなければならない。また、機械を導入できる畑でも、できるだけ手作業で管理し、品質の向上に努めている（図 5)。

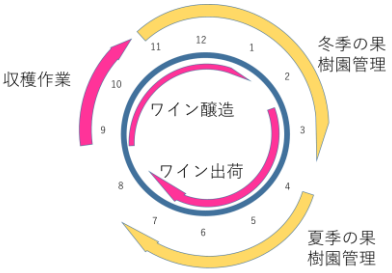

図５　障がい者によるワイン醸造に関わる作業暦

ブドウ園とワイン醸造の仕事は、指導員 1 人と障がい者 8 人の単位で行っている。これは、施設本部からブドウ園まで小型バスで移動する必要があるためで、この小型バスに乗車できる定員が作業単位になっている。ブドウ園のスタッフは 5 人おり、そのうちの 1 人はブドウ栽培のマイスターの称号を持っている。またブドウ園に専従する障がい者は約 25 人である。

ブドウ畑での仕事としては、ブドウの木の枝を剪定する作業があるが、花芽が着く枝と、伸長する枝とを見分けながら作業をする必要があるため、スタッフが担当している。しかし、障がい者の人には、剪定で落下した枝や葉を収集し、畑から回収する作業や、それらを畑の表面に散布し、雑草の防除や土壌水分の保持のためにマルチする作業に従事している。このように作業をスタッフと障がい者の間で分業することによって、剪定作業を効率的にできるようになっている。また、ブドウの蔓の誘引作業についても、障がい者の人が携わっている。これは、伸びすぎて垂れてしまった枝を、支柱に固定する作業で、障がい者でも慣れてくれば多くの人ができるようになっている。木の高さを刈そろえたり、伸びすぎた枝を切り落としたりといった仕事も、一定の基準を与えてやって、作業の判

断を付けやすくしてやることで実施できるようにしている。

オランダ

オランダでは Care Farm(支援農場)と呼ばれる特色ある形で、社会的弱者などが集うことができる農場運営がみられる。その例を以下に示す。

施設名　Hoeve Klein Mariëndaal
住所　　Diependalseweg 4, 6813 GE Arnhem

Wargeningen 大学農学部の研究員である Dr. J. Hassink が中心になって、2010 年に自治体の補助を受けて設立した C/F である。Arnhem の市内に位置し、市中心部からの交通の便の良い場所に立地している。12ha の敷地の農場で、中心の 1ha の部分に約 500 ㎡のレストラン（Tea house）や管理棟が位置している。

39 人の高齢者や障がい者がこの農場を利用している。内訳は 24 人の高齢者と 22 歳から 55 歳までの知的または精神の障がい者が中心である。7 人のスタッフが働き、1 名が施設管理者として、4 名が高齢者の介護ならびに活動支援を行い、2 名が障がい者の人たちのサポートを担当している。看護師は配置されていない。またここでは、ボランティアの活動を積極的に取り入れており、大学生などが約 40 人/週、ボランティアとして無給で農場をサポートしている。これらのボランティアを対象に、年 2 回のミーティング開催し、サポートの方針や運営について理解を求めている。

農場の規模：　ニワトリを約 3000 羽飼育している。内訳は、肉養鶏が 2000 羽、採卵鶏が 1000 羽である。肉養鶏の屠殺・解体は、専門の業者が行っており、得られた食肉は一般販売されている。また収集された卵も市内で販売されている。この農場では、特に農場独自の販売所を有していないが、希望者はレストランで購入することができる。

牛は、肉用牛を 5 頭飼育している。またヒツジも 6 頭飼育している。これら家畜も、大きくなると販売しているが、頭数が少ないため収入としての割合は大きくない。

またロバを 4 頭飼育している。ロバは、特にペット的な位置づけで飼育しており、ヨーロッパの福祉農場では多く見られる家畜である。ロバは、ウマに比べて頭がよく、スピードはないが力持ちで、よく学習するため、障がい者らが遊ぶのに適した動物であると考えられている。また粗食でも平気であり、丈夫で怪我をしにくく、ウマなどと比較して飼育しやすいという点も重要である。

利用者の活動内容：　高齢の利用者は農場内で、主に散歩や団欒といった軽く身体を動かし、心身をリフレッシュしながら毎日の安定した生活をおくるよう努めている。また適度に体を動かし、レストランのおいしい食事を食べることで、昼食を大事にするオランダでは、充実した食生活を構成している（表 1）。

一方、障がいを持つ利用者たちは、農場内での動物の世話や納屋の修理や改造などを手伝うことで、仕事の技能を学び、また仕事の達成感を得ている。

表 1　農場でのサービス内容

高齢者向けサービス		障がい者向けサービス	
時間	活動内容	時間	活動内容
9：00～	コーヒー 健康状態の点検と団欒	9：00～	コーヒー 健康状態の点検と作業計画の立案 その後に作業活動を開始
10：00～	庭の散歩、軽い運動、軽作業		
		10：30～	コーヒー
11：00～	コーヒー	11；00～	作業活動
12：00～	昼食	12：00	昼食
13：00～	昼寝	13：00～	作業活動
14：00～	軽作業		
		14：30～	コーヒー
15：00～	コーヒーと休憩	15：00～	作業活動
16：00	帰宅	16：00	帰宅

農場の施設や、そこで使用する道具の多くは、高齢者や障がい者が利用することを前提に設計され、また配置されている。このため建物の多くの場所はバリアフリーになっており、また視覚支援や障がい者や高齢者が使いやすい専用の道具などが工夫されている。

多くの人が集える農場づくり：　農業として限定的に考えるのではなく、農場を農業を実施する場であると考えると、農場には様々な機能があることに気が付く(Multifunctional farm)。Dr. Hassink は、農場は農作物や家畜を生産するだけでなく、障がいを持つ人や高齢者が集う場にもなりえると考えている。そしてその延長線には、農場は農業だけでなく自然を学ぶ場であったり、人と人とのコミュニティーの場にもなると考えている。

そのためこの農場では、人が集う場所を提供するために、農場内にベンチや休憩所、花壇などを設置している。そしてこれらの施設を作るにあたり、障がい者の人たちがボランティアとともに協力し合っている。

また最近は、大人たちだけでなく発達障がいや自閉症、知的障がいの子供に対しても、農場を活用した学習の場を提供している。専門家の指導の下で、これらの障がいのある 6 歳から 14 歳までの子供たちを対象として、週末特に土曜日に、農場の動物とのふれあいや、農場の周囲の森の中での様々な探索・冒険をしたり、ゴーカートに乗ったりといった遊びの機会を作っている。また雨の日には、料理やパン作り、ゲームなどの屋内活動を行っている。このような場を提供することで、自宅に閉じこもりがちなこれら子供たちに外出し、家族以外の人たちと交流する機会を作っている。また、このような場と時間を週末に作り出すことで、家族に対しても、子供たちの世話を和らげる役割を果たしている。

イタリア

イタリアでは、福祉農場として障がい者雇用を進める中で、有機農業が重要な基本骨格となっていた（図6）。

図6　Bio（有機）は、イタリアの福祉農場の重要な要素である

イタリアでは障がいの程度が重度の人たちを対象としたプログラムと、中度から軽度で経営ベースでの経済活動に参加できる人や社会適応の課題のある人を対象に多くのプログラムがある。まずピサ大学では、広大な敷地を有する大学農場の一部圃場を貸し出して社会的不適応者や障がい者に対しての就労訓練を行っている。実施母体は 2008 年に設立された非営利法人の Ortic Etici で、薬物中毒や刑務出所者、未就労の若者や精神または知的障がいの人が対象となっている。訓練プログラムは、10 人から 15 人程度で、毎日 8 時から 12 時半までの間、農作業に従事し、午後は各自の生活を過ごすことができる。農作物は、農学系技術者が生産指導し、高品質で付加価値の高い生産物を街に運んで消費者に直接売る引き売りや、宅配システムで販売している。売上収益は利用者に還元され、給与は業務内容や勤務時間によって異なるが月額 200€~700€である。Ortic Etici は、ピサ周辺で活動する社会的協同組合(Social Cooperative)で、約 70 人の利用者と 30 人のスタッフで運営されており、農業や清掃作業、給食などを手掛けている。イタリアには、農業分野で活動する S/C は約 600 事業所あり、消費者は農産物を購入することで社会的弱者をサポートすることができる。

ヨーロッパでは、環境に対する関心が高く、高品質で付加価値の高い食品は有機農産物であることが条件となる。これは、東欧やアフリカ、中南米からの安い農産物と対抗する上でも重要な要素となっている。このため、一般農家である Bio Colombini Farm では、2000 年頃から家族で有機農業を開始し、2003 年には 5 人の障がい者を雇用することをきっかけに規模を拡大し、現在は家族 2 人の他に健常者 5 人と 15 人の障がい者を雇用し宅配システムで農産物を販売している。障がい者の勤務は、7：00～12：00 と 15：00～18：00 となっており、年収は 5000€～7000€である(参考 2010 年の平均年収 18000€)。このような福祉農場は、現在イタリア全土で 2000 以上ある。

タイ国

タイ国における障がい者の農業への取り組みとして、タイ国教育省の支援の下で特別支援学校の調査を行った。タイ国では、福祉行政が発展途上にある中で、特別支援学校において卒業後の就労を支えようと力を入れている。タイ国教育省が管轄する小学校や高校、特別支援学校は以下のような内訳である。

	学校数	生徒数
小学校	28,470	4,722,763
中学・高校	2,358	2,345,992
福祉学校	51	34,288
特別支援学校	43	11,861
合計	30,922	7,114,804

ここからわかるように、特別支援学校の数が少ないため、そこに通学する生徒数が全体の 0.16%と極めて低く、障がいを持つ児童が十分教育を得られない状況が分かる。このような社会背景の中で、農業が盛んな同国では、障がい者の就労の可能性として農作業は大きな可能性を持っており、多くの特別支援学校では農業に積極的に取り組んでいる(図 7)。

また、徐々にではあるが、タイ国障がい者エンパワメント協(Society for empowerment of persons with disabilities Thailand)のように、障がい者自らが農業に取り組むことで自立を目指す動きがある。この教会では、釣り堀や農産物の販売により経営を行いながら、剰余資金を障がい者の営農支援に回すことによって自立支援を行っている(図 8)。

図7　タイ国ロッブブリー特別支援学校での水耕栽培による農業の取り組み

図8　農業によって自立を目指すタイの農業者

障がい者が農業分野で働く姿に関しては、タイ国でも大変関心が高く、本研究の過程においてタイ教育省の後援の下で、「Association between human welfare and agriculture in the world」としてシンポジウムを開催し、タイの特別支援学校の校長や教頭など主要な教員に対して、報告することができた（表 2)。

表 2　タイ国における本研究の報告会への参加者

日時　2015 年 9 月 26 日～28 日
場所　タイ国カセサート大学カンペンセンキャンパス

日本側参加者		
岐阜大学教育学部	教授	池谷　尚剛　PhD
岐阜大学応用生物科学部		
附属岐阜フィールド科学教育研究センター	教授	大場　伸也　PhD
岐阜大学地域科学部	准教授	ゲラン　ジル
岐阜大学地域科学部	准教授	フォン　フラクシュタイン　アレクサンドラ
中部学院大学短期大学部幼児教育学科	教授	菊池　啓子
聖徳学園大学教育学部	教授	安田　和夫
タイ側出席者		
タイ国教育省基礎教育局特別支援教育課	課長	Dr. Amnat Wichayanuwat
Wheelchairs and friendship Center of Asia	Chairman	Suportntum Mongkorisawasdi
ロッポブリー特別支援学校	校長	Dr. Sujin　Swanagsri
タイ国全特別支援学校　46 校	校長・教頭・就労支援担当教員など	約 150 名

障がい者の就労を見据えた産業教育としての大学農場での取り組み

ヨーロッパ各国の調査から見えてきた当該の国における福祉と連携する農業では、農場の規模が極めて大きいことが注目される。これらの国々では、大規模複合経営に基づく農業が多く、これによって通年にわたって障がい者に仕事を供給することができる。一方日本では、単作の農業経営が多いため、季節による仕事の繁忙期と閑休期の差が大きいことが課題として挙げられる。また、ヨーロッパでは、畜産や食品加工との組み合わせが多く、高度な農業技術が必要とされていた。

このような知見の下で、日本における農業と福祉の今後の展開では、福祉分野に対しても農業に関心を持つ農業技術者の養成が重要になっていく。

図 9　就労支援型 B 型施設の水耕栽培農場での農学系大学生の見学

農学系学生は、そもそも社会福祉に興味をもって進学したものではないため、障がい者支援に対する関心は低い。しかし、障がい者が農業分野で働くことの意義や可能性を学ぶことで、今後これら産業分野で働く人材が福祉を理解し、障がい者の就労やインクルージョンに前向きに取り組むことになる可能性がある(図 9)。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　0　件）

〔学会発表〕（計　2　件）
① 大場伸也　イタリア、フランスの福祉農場の事例紹介　第 15 回人間福祉学会　平成 27 年 10 月 25 日　中部学院大学（岐阜県各務原市）
② 菊池啓子、大場伸也　タイにおける就労支援・就労移行支援に関する一考察　第 15 回人間福祉学会 平成 27 年 10 月 25 日　中部学院大学（岐阜県各務原市）

〔図書〕（計　0　件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　0　件）

○取得状況（計　0　件）

〔その他〕
ホームページ等
http://www1.gifu-u.ac.jp/~gufarm/fukushikenkyukai/html/

６．研究組織
(1)研究代表者
大場　伸也（OBA, Shinya）
岐阜大学・応用生物科学部・教授
研究者番号：80221836

(2)研究分担者
池谷尚剛（IKETANI, Naotake）
岐阜大学・教育学部・教授
研究者番号：70193191

ゲラン ジル（GUERRIN, Girus）
岐阜大学・地域科学部・准教授
研究者番号：40402151

A フォン　フラクシュタイン
（A., von Fragstein）
岐阜大学・地域科学部・准教授
研究者番号：50402152

菊池　啓子（KIKUCHI, Keiko）
中部学院大学短期大学部
・幼児教育学科・教授
研究者番号：70369528